抄訳：李存信『毛沢東の最後のバレエ・ダンサー』[1]
〈その 2〉第十四～十五章

星　野　幸　代

第十四章　転機

……（前略）……

1976 年 10 月 6 日、毛沢東主席が逝去して一ヶ月もしないうちに、僕たちの舞踊学院はまた途方もないショックを受けた。このニュースはあまりに唐突だった。毛沢東夫人とその他の「四人組」メンバーが一挙に逮捕されたのだ。僕は見捨てられた子どものような気がした。

「四人組」の失脚はすみやかに進んだ。軍も警察も彼らを助けなかった。舞踊学院で僕たちは変わらぬ日課をこなしていた、政治指導者たちが学校を去った以外は。それはもう政治学習がなくなり、もっとバレエの練習に時間をかけられることを意味した。

華国鋒[2]は毛主席がこの国のために定めた方向性を変える気はなかった。彼の率いる政府の最初の六か月は、これまでと変わらなかった。だが、変化が避けられないことは誰の目にも明らかだった。軍は低姿勢をとっていたが、本当に起きていることは何なのか、殆どの人は知らなかった。

そうしている間に、副院長の張策先生は僕の踊りに気をとめた。まったく突然に、僕

オーストラリア・バレエ団 1996 年日本公演パンフレット

は蕭先生と張旭先生の特待生になっただけでなく、張策先生のお気に入りとなった。学年末試験はとても楽しめたので、僕は何度受けてもよいと思ったほどだ。中国の将来は不確かなものだったけれども、僕はとうとう自信を得たのだ。

第十五章　マンゴー

……（前略）……

1977年7月は、僕が北京舞踏学院に入って六年目の年だった。その年、学院は学生全員に三週間の夏休みを与え、故郷へ家族に会いに帰らせてくれた。もし学生が希望するのなら、学院にとどまって練習することにしてもよいのだ。

僕は父母に手紙を書いて、学院に残ることに決めたと伝えた。家族には会いたくてたまらなかったし、彼らが恋しかった。お母さんが作った餃子を食べて、トンボをとって、キリギリスが鳴くのを聞いて……でも僕は初めて、学院に残ることを楽しいと思ったのだ。

この三週間のうちに、「四人組」路線に協力したやからの逮捕が始まった。文化部の主要な官員はすべて逮捕され、僕たちの学院の肖院長と張策副院長も連れて行かれた。張先生が学院の門を出て行くときの絶望の表情は一生忘れられない。張先生は、毛沢東夫人の部下の一人として任命された以外に、何も悪いことはしていなかった。今、彼は面目を失ったのだ。[3] 学院はにわかに緊張した空気に包まれた。

でも僕は、こういった事件によって練習を乱されまいと心に決めていた。僕は集中しなければならなかった。張旭先生とその他の数人の先生はみな学院に残っていたので、僕は先生たちにレッスンをつけてもらった。

ある日、僕がターンを練習しているとき、蕭先生がふいにスタジオに現れた。

「調子はどうだ、存信。」蕭先生は尋ねた。

「いいですよ。先生はこの休暇中はいらっしゃらないと思っていました。」

「君のピルエットについてはアドバイスできると思っていたんだ。」蕭先生は言った。僕は五回転ピルエットに取り組んでいて、この苦しい壁を破るのに難儀していたところだった。蕭先生は僕が休暇中これに取り組むつもりだと知っていた。三十分も練習していないのに、ピルエットは下手になるばかりだったので、僕はますます落ち込んでしまった。

「どうして僕はこんなに駄目なんだ。なぜ五回出来ないんでしょう。」僕は床にしゃがみこんだ。

「もしも五回転ピルエットが簡単にできるものなら、世界のすべてのダンサーがやっているはずだろう。存信、マンゴーは試してみたかい。」

「いいえ。」僕は、こんなときに先生は何を言いだすのだろうと思った。

「マンゴーは、最も個性的な味を持った最も素晴らしい果物だ。世界で限られた地域で

しか採れないし、旬も短い。私は君にピルエットをマンゴーのように扱ってほしいと思う。もし今君にマンゴーをあげたら、君はどうする。」蕭先生はたずねた。

「食べます。」僕は答えた。

蕭先生は笑った。「困った子だな。」

「なぜですか。先生は食べないんですか。」僕は聞いた。

「なぜそうせっかちなんだい。君がマンゴーを食べたくてしょうがないのはわかるが、面白さはそのプロセスにあるんだ。まず僕はその独特の形を鑑賞し、色を観察し、香りを楽しむ。その重さを感じて、皮をむいて香りを味わう。たぶん、僕は皮も味わってみるし、勇気があれば種も食べてみるだろう。さあ、究極の満足が来る、果肉だ。そうだ、君はこのプロセスのすべての段階を楽しんで、果実の沢山の層を味わって、その丸ごとの価値を楽しまなければならない。私はピルエットを同じ方法で扱ってほしいんだよ。勇気を持って！ピルエットの秘密とエッセンスを発見しなさい。君がすべての段階を踏んで果肉を味わわないなら、誰か他の者がそうするだろう。やってみろ。」

蕭先生とマンゴーの話は僕のイメージをかきたて、新たな感覚を体験するために、僕は高度な次元へと挑戦してみた。僕は情熱をピルエットの練習に注ぎ込み、すべてのプロセスを楽しむようになった。

これは学院に入ってはじめて、僕が自己と向き合った三週間だった。僕は時間のほとんどを練習に当て、朝はよく寝過ごして朝食を抜いた。僕は陶然亭

指揮：ジョン・ランチベリー
演奏：東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団（東京）
関西フィルハーモニー管弦楽団（尼崎）
マノン：ジュスティーヌ・サマーズ（20）
ヴィッキー・アタード（21,27）
デ・グリュー：スティーヴン・ヒースコート（20）
リー・クンシン（21,27）
レスコー：アダム・マーチャント（20）
ナイジェル・バーリー（21,27）
ムッシューG.M：ポール・ド・マッソン
レスコーの情婦：リネット・ウィルス（20）　ジェーン・ファニー（21）
看守：リチャード・ボウマン
マダム：キャスリーン・ゲルダード
乞食のかしら：スティーヴン・ウッドゲイト（20,27）
マーク・キャシディ（21）
高級娼婦　紳士　客　娼婦　女優　老紳士　宿の主人　下女　市民　乞食　ネズミとり　召使　婦人　給仕
オーストラリアバレエ団
＊やむを得ない事情により出演者が変更になる場合があります。
Conductor：John Lanchberry
Orchestra：Tokyo City Philharmonic Orchestra (Tokyo)
Kansai Philharmony Orchestra (Amagasaki)
Manon：Justine Summers (20)
Vicki Attard (21,27)
Des Grieux：Steven Heathcote (20)
Li Cunxin (21,27)
Lescant：Adam Marchant (20)
Nigel Burley (21,27)
Monsieur G.M.：Paul De Masson
Lescant's Mistress：Lynette Wills (20)　Jane Finnie (21)
The Gaoler：Richard Bowman
Madame：Kathleen Geldard
Beggar Chief：Steven Woodgate (20,27)
Marc Cassidy (21)
Courtesans　Gentlemen　Clients　Harlots　Actresses　Old Man　Innkeeper　Skivvies
Townspeople　Beggar Men　Beggar Women　Ratcatcher　Servants　Guards　Footmen
Artists of the Australian Ballet
* The artists may change under certain circumstances.

オーストラリア・バレエ団1996年日本公演パンフレット

公園へ行って、湖の周りを散歩し、老人が太極拳をするのを眺めた。僕は学院に残ったほかの同級生たちと一緒に将棋をうち、トランプをやり、程祥軍[4]の家へ行った。一人で浴室を三十分独占した日もあった。

この三週間は僕に将来を考え過去を振り返らせてくれた。今の僕は、トウシューズを一日中履いてつま先立ちしていなければならないと恐れていた、悲しげな、おどおどした小さな少年を思い浮かべて笑った。もうあれから六年目になろうとは信じられなかった。僕はクラスの副級長で、共産党青年団の幹部の一員なのだ。今や僕はバレエにおいて抜群の技を追及している。僕は自分の成果が誇らしかった。

三週間は飛ぶようにすぎた。僕は一分一秒を楽しんだ。僕は学年の後期を待ち切れなかった。というのは、僕はもっと高いハードルを自分に課していたからで、それらを越えようとするチャンスが欲しくてたまらなかった。

残りの学生が休暇から戻ってきて、僕たちの勉強がいつものように始まった。その学期の終わりごろ、北京舞踊学院の卒業生で蕭先生の親友、兪芳美が日本から戻ってきて、テレビとビデオデッキ（当時としては非常に新しいもので、僕たちはそんなものを聞いたこともなかった)、ビデオテープを何本か、バレエ学科への土産として持って帰った。そこにはバリシニコフ、ヌレエフ、マーゴット・フォンテーンのビデオがあり、ゲルシー･カークランドら、アメリカで育てられたダンサーのも含まれていた[5]。はじめこれらのビデオは「参考資料」として舞踏学院の幹部と教員しか見られなかった。学生たちはそんな悪い西洋の影響に触れることは許されなかった。

兪芳美の訪問からすこしたったある日、僕は蕭先生と廊下ですれ違った。

「君にいつかバリシニコフのバレエを見せたいな。」蕭先生は熱心に言った。

僕はこのロシアのバレエ・スターについてほとんど聞いたことがなかった。彼はバレエ界の新しい旋風だった。

「彼はワシリーエフ[6]より上手いんですか？」僕は尋ねた。

「そうだよ！そうだ､テクニックの観点からね。私はあんなにダイナミックなダンサーを見たことがない。」蕭先生は言い、興奮して頭を振った。

「僕がそういったビデオを見る手段がありますか？」僕は望みを持って尋ねた。

「私達はそれについてもう議論したことがある。」蕭先生は答えた。「幹部は資本主義の影響を心配しているんだ。張先生にもう一度話してみるよ。」

二、三日後、午後のリハーサルの間、上級の生徒たちはみな三階のスタジオに呼ばれた。僕はすぐに、鏡の前のベンチに置かれたテレビとビデオデッキに気づいた。

張旭先生は生徒たちのどよめきが収まるのを待った。

「バリシニコフは､多分今日世界で一番傑出したダンサーの一人だろう。テープを見る

目的は、君たちが彼から学び、君たちに今日の世界のダンスの水準を分かってもらうためだ。これは、言っておくが、西洋世界のライフ・スタイルを学ぶためではない。バリシニコフを見ることによって、君はこれと同じレベルに達するにはどれだけ厳しく練習すべきか実感するだろう。今日は、バリシニコフ自身の振付による『くるみ割り人形』と『愛と喝采の日々（原題 the Turning Point, 1977、ハーバート・ロス監督、米）』だ。」

僕はバリシニコフに魅了された。僕は『くるみ割り人形』のようなバレエをみたことがなかった。信じられないくらい美しい音楽だった。バリシニコフと彼のパートナー、ゲルシー・カークランドの踊りは、僕が有能なダンサーだと思っていたレベルを遥かに上回っていた。

ビデオの合間の五分間休みにも、生徒たちの誰も部屋を離れなかった。席を取られたくなかったからだ。『くるみ割り人形』以上の映像なんてありえない、僕は思った。が、僕は間違っていた。

『愛と喝采の日々』は僕を完全に圧倒した。催眠術にかかったようだった。バリシニコフから目を離すことが出来なかった。僕の心臓は、彼の驚異のジャンプと加速するターンとともにはずんだ。バリシニコフの動きは優美で、彼の演技は輝いていた。生涯で初めて、僕はバレエがいかに真に精巧なものであるうるかを知ったのだ。

その瞬間から、僕は情熱を持ってバレエを愛するようになった。僕は、バリシニコフがあんなふうに踊れるなら、僕にも出来るのではと思いこむことにした。僕は十六歳だったが、待ち切れなった。切羽つまった気がした。僕は自分のこれまでの枠を打ちこわして、新しい目標をうち建てたのだ：自分の両親だけでなく、中国全体を誇りに思われたい、と。

いまやジャンプの練習をしに戻れるように、僕は大急ぎで食事をかきこむようになった。朝は五時に起きた。足首に砂袋を結びつけ、舞踊学院の建物の四段の階段をあがったり下りたりした。空いているスタジオの隅々まで使って、跳躍の練習をした。僕は妄想につきまとわれていた。美しい鳥やトンボのように飛びたい、だから僕は、自分に目標を思い出させるため、「飛べ」とバレエシューズに書き込んだ。平らなところがありさえすれば、時間がありさえすれば、シットアップやエクササイズをやった。周りの人は僕が狂ったのではと思ったが、僕は気にしなかった。今や願いは一つ――バリシニコフのように踊ること。

1977 年、僕の六年生の年、練習と、訓練と意思の結果、僕のジャンプ力は改善されていたが、最高にはいたっていなかった。僕はまだ道は遠いと知っていた。そのころ、蕭先生が僕にターンに挑戦させ始めた。

僕はターンを簡単には出来なかったが、しかし僕のジャンプでつかんだ新しい感覚はますます僕を練習に駆り立てた。僕は、自分に無理な目標を課した。ある夜、アイデア

が浮かんだ。皆がぐっすり寝ている間に、僕はろうそくとマッチ箱を持ってスタジオへ行った。

スタジオの片隅にろうそくを灯し、僕はターンを練習した。ろうそくはかすかな光を僕の前で投げかけるだけだった。それは大変だったが、僕は暗い中でターンが出来たら、明るい中でターンするのはやさしいだろうと思ったのだ。ろうそくを倒してしまう危険性には無頓着だったし、こんなに遅く起きているところを先生たちにつかまるんじゃないかとも思いつかず、毎晩毎晩絶え間なく続けた。その学期の終わり、僕が延々と繰り返しターンしたスタジオの床には、浅いくぼみが出来ていた。

多くの人々が僕の急速な進歩に驚いたが、蕭先生は驚かなかった。ある夜、蕭先生は僕がターンを練習している現場をおさえたのだ。そのときは消灯時間を過ぎていたので、僕はひどく怒られるかと思ったが、その代わり、私は驚かないよ、と蕭先生はいい、夜間練習を僕と先生との秘密にしてくれた。

大体同じころに僕はまた完ぺき主義ではいけないことを自覚し、柔軟な対応の重要さを知った。一度僕はベッドのいつもの場所で熟睡し、起きたときには足の感覚がなくなり、クラスメートに助け起こしてもらわなければならなかった。ある教員はそのころ僕にこういった、僕は腿が太すぎるので主役は無理だろうと。僕はそれで長いことがっかりしていた。ラップを足に巻きつけて、汗をかいて細くしようとまでした。

今までに僕はこれらのスタジオで、他の生徒と受ける一日一回のルーティンと合わせて、一日に五回練習していた。目が覚めたあと、レッスンの前、昼寝の時間、午後のリハーサル、夕食後の寝る前。乾いたTシャツが擦り切れたときには、ランニングだけで練習した。バレエシューズでさえ汗でひりひりした。

「私は、自分がよく練習する学生だと思っていた――日に三回練習していたからね、しかし、五回とは聞いたことがない。」蕭先生は愉快そうに言った。それから、ちょっとまじめな調子で言った。「健康に気をつけて。私は君が道を歩き続けるのを見たいから。」

このころまでに、毛沢東が後継者として選んだ華国鋒は失脚し、鄧小平が中国のリーダーになっていた。僕は北京舞踊学院の傾向が劇的に変わるのを感じた。かつて、鄧小平の「白猫でも黒猫でも、ネズミを捕ってくるのが良い猫だ」という実用主義説は否定された。なのに今や、その説は絶大な影響力を取り戻した。鄧小平は中国のためになるならば、どんなシステムであろうと構わないのだ。

北京舞踊学院にも新しい院長、宋景清がやってきた。彼女は、六年間のコースを一年延長した。僕たちは1979年の2月まで、卒業できないことになった。僕たちは、ダンスの代わりに政治を学んで、あまりに多くの時間を無駄にしてしまった、と宋景清は言った。宋院長は、卓抜したテクニックだけを集中的に追求するためには、あと一年必要だ

と確信していた。

それから1978年の初頭までには、鄧小平の改革開放政策の衝撃を身をもって感じることができた。鄧小平は、毛沢東のすべての言葉に従ったことはあやまりであった、政治活動と政治学習をやめるべきだ、と言ってのけた最初の人物だった。共産党員の中には懐疑的なものもいたし、党外の多くの人も同様だった。文化大革命はそれほど恐ろしい記憶を残していた。なぜ今度は新しい政策だからといって信じることができよう。中国は不安定で、早く行動を起こすには麻痺しすぎていた。

僕たちが思想的に偏った学生であると批判されずに、堂々と芸術面を追求することができるようになったのは、学院での最終学年だった。政治的な圧力は衰退していった。厳選された西洋の本、映画、芸術団体が、また中国にやって来るようになった。外国書を所有するとか、外国の「色付きの映画」を見るのは流行りになった。僕たちは、西洋の知識を切望した。本にラブ・シーンを見つけると、毛布の下で懐中電灯で照らしながらこっそり手書きで写し、写したものをまわしあった。どんなに外国文学に飢え、どんなに西洋世界に魅了されたことか。

鄧小平の新政策は北京舞踊学院に新しい空気を吹き込んだが、それははじめはよそよそしいものに感じた。かつて二週に一回だった共産党青年団会議は一ヶ月に一回になり、質疑を出すものもいなくなった。会議に出席すべきか、練習すべきかという僕の葛藤もなくなった。新しい会員の勧誘もゆるくなり、党委員会書記の影響力も前ほどではなくなった。物質的な享楽に関する追求、資本主義の毒などについても、解釈が変わってきた。恐らく北京舞踊学院はかつて江青の陣地の一つで、彼女の影響が余りに深く、長かったからだろう、鄧小平の新政策をもろ手を挙げて受け入れるまでにしばらくかかった。しかし僕にとっては、この予想外の一年は一番実り多い年となった。僕たちは『石の花』、『白鳥の湖』、『スパルタクス』といった古いロシアのバレエ映像を見始めた。僕たちはガリーナ・ウラノワ、マヤ・プリセツカヤ[7]ら有名なバレエ・スターを見た、もちろん、ウラジーミル・ワシリーエフも。ロシアの亡命者ルドルフ・ヌレエフが西洋世界でもっとも尊敬されるバレリーナたち、マーゴット・フォンテーンらと踊るものでさえ見ることを許可された。これらの傑出した、感動を与えるダンサーたちの映像は何週間も僕の心に焼きついていた。

その頃には、西洋バレエの本を読むことはもはや罪ではなくなっていたので、僕は蕭先生に、三年生の時僕のマットレスの下にバレエの本を入れたのは誰なのか、尋ねてみた。[8]

「気にいったかい。」蕭先生は明るく笑った。

僕はうなづいて、

「ありがとうございました。」と、心の底から言った。

注

1　底本はCunxin, Li. Mao's Last Dancer. Berkley Books, New York 2003、また中国で訳出された王暁雨訳『従農村少年到芭蕾巨星的伝奇』（文匯出版社、2007）を参考にした。

2　1976年9月9日毛沢東が逝去すると、10月6日華国鋒（1921-2008）らによって「四人組」が急襲、逮捕され、7日には華国鋒が党中央委員会主席と中央軍事委員会主席に任命された。華国鋒は、その権力の正統性を毛沢東に求めて、「毛主席の決定と指示の断乎たる擁護」を主張した。しかしもはや毛沢東の個人的権威に頼って政策を遂行することは不可能であり、政権復活した鄧小平（1904-1997）によって1978年以降政策を大きく転換させることになる。（野村浩一「Ⅰ　現代中国政治の展開と動態」『岩波講座現代中国　現代中国の政治世界』岩波書店、1989、37-38頁）

3　前掲注1『従農村少年到芭蕾巨星的伝奇』では、この二文が削除されている（154頁）。

4　北京舞踊学院の同級生の一人。あだ名は「土匪（ごろつき）」。

5　英語表記Mikhail Baryshnikov 1948-　ソ連ラトビア共和国リガ生まれ。ワガノワ舞踊学院出身、1966年キーロフ・バレエ団入団、同年ヴァルナ国際コンクール金賞。1974年夏、カナダ巡業中に西側へ亡命。アメリカン・バレエ・シアター等で主役を踊る。（佐々木涼子「ミハイル・バリシニコフ」ダンスマガジン編『バレエ・ピープル101』新書館、1993、126頁）

英語表記Rudolf Nureyev 1938-1993　バイカル湖付近で生まれる。タタール系。ワガノワ舞踊学院で学び、58年キーロフ・バレエ入団。1961年パリ公演の後パリ空港で亡命。62年～79年ロイヤル・バレエのフォンテーンと「奇跡のパートナーシップ」を組む。83-90年パリ・オペラ座監督。1993年エイズにより死去。（ケイコ・キーン「ルドルフ・ヌレエフ」前掲『バレエ・ピープル101』、112頁）

Margot Fonteyn 1919-1991　英国生まれ。ヴィック＝ウェルズ・バレエ学校から同バレエ団デビュー。後にサドラーズ・ウェルズ・バレエ、ロイヤル・バレエ団と改名していくバレエ団のプリマとして活躍。61年ヌレエフと初共演。79年引退。（ケイコ・キーン「マーゴット・フォンティーン」前掲『バレエ・ピープル101』、138頁）

Gelsey Kirkland 1953-　アメリカ生まれ。アメリカン・バレエ・スクールで学び、1968年ニューヨーク・シティ・バレエでデビュー。74年にアメリカン・バレエ・シアターに移籍し、亡命したばかりのバリシニコフの相手役をつとめる。（ゲルシー・カークランド『ダンシング・オン・マイ・グレイヴ』ケイコ・キーン他訳、新書館1988）

6　英語表記Vladimir Vasiliev 1940-　モスクワ生まれ。モスクワ・バレエ学校出身。1959年ボリショイ・バレエでデビュー。1964年ヴァルナ国際コンクールグランプリ、同年ニジンスキー賞。1971年から振付をはじめる。（赤尾雄人「ウラジーミル・ワシーリエフ――彷徨する英雄」『ダンスマガジン』2009年7月号、新書館）

7　Galina Ulanova　1928年マリインスキー・バレエ入団、44年ボリショイ・バレエ移籍。59年に西欧での公演で一成を風靡し、62年引退、以降ボリショイ・バレエで後進を指導。（「ガリーナ・ウラノワ」『バレリーナは語る』、108頁）

Maya Plisetsukaya 1925-　モスクワ生まれ。モスクワ舞踊学校入学、43年ボリショイ・バレエ団入団。『瀕死の白鳥』の名演で知られる。70年代から西側の振付家と共同の振付、公演を多く手がける（山脇晴子「マヤ・プリセツカヤ」前掲『バレエ・ピープル101』、150頁）。

8　Mao's Last Dancer. p.206